

5) 6年間の胃癌手術成績の検討

若桑 正一(豊栄病院外科)
松原 要一(新潟大学第一外科)

昭59年11月より6年間の胃癌手術症例は187例で、早期癌127例、進行癌60例であった。手術術式についてみると胃全摘術は36例に行われ、全摘率19%であった。胃亜全摘術、胃切除術は139例で、再建術式についてみるとB-I法115例、B-II法14例、空腸間置法2例、Roux Y法4例、double tract法4例であった。切除率は97.8%となった。

組織学的壁深達度とリンパ節転移についてみるとm癌85例にはリンパ節転移を認めず、sm癌では8例にn₁の転移を認めた。そこで局在Aの術前m癌と診断した小病変に対しては左胃動脈上行枝温存の縮小手術を最近行っている。

またC領域後壁のIIaの病変に対してnear total gastrectomyを行い、double tract法の再建例を紹介し、術後残胃透視で生理的ルートを通ること、内視鏡検査では残胃癌が少ないことを報告する。

6) 当科における胃癌患者の重複癌について

阿部 僚一・榊原 清(新潟県立吉田病院)
吉岡 一典・小山 真(外科)

1978年10月1日から1990年9月30日までの12年間で当科で扱った原発性胃癌患者数は774例で、このうち15例に同時性重複癌を、15例に異時性重複癌を、3例に三重重複癌を認めた。重複癌の発生率は4.3%で他施設よりも有意に高かった。治癒切除率は同時性重複癌で47%、異時性重複癌は40%、三重重複癌は100%であった。同時性重複癌の治療成績は必ずしも良好ではなかったが、異時性重複癌の予後はきわめて不良であった。他臓器癌は、大腸癌、肺癌、食道癌などが多かった。また、合併胃癌については早期胃癌のしめる率が高かった。今後重複癌の発生率が高くなることが予想された。

7) 胃亜全摘術後の膵関連酵素の変動

一メシル酸ガベキサート(FOY)投与の影響は?—

名村 理・草間 昭夫
新国 恵也・吉川 時弘(厚生連中央総合病院外科)
佐々木公一

目的:胃癌術後の膵関連酵素の変動を明らかにし、蛋白分解酵素阻害剤(FOY)投与の影響を検討する。

対象, 方法:胃癌に対して胃亜全摘術(治癒切除R2郭清)を行った10例を、無作為抽出法によりFOY投

与群(600mg/日、第1~第7病日)と非投与群の2群に分け、術前、第1、3、5、7、14病日の総アミラーゼ、膵型及び唾液型アミラーゼ、トリプシン、PSTI、リパーゼ、エラスターゼ1、フォスフォリパーゼA2の血清濃度の変動を観察した。

結果:1.膵関連酵素は、フォスフォリパーゼA2を除きすべて術後早期の値が術前値よりも高値を示した。また、両群とも唾液型アミラーゼは第14病日には術前値に復したが、膵型アミラーゼ、トリプシン、PSTI、リパーゼ、エラスターゼ1はいずれも第14病日まで高値が遷延した。2.胃亜全摘術後の膵関連酵素の変動は、FOY投与群、非投与群の両群間に有意差がなかった。

8) 坂町病院における胃切除後の骨障害について

福田 稔・坪野 俊広(坂町病院外科)

今年6月の本会で、白根地区の10年間にわたる胃切除後の骨障害を報告したが、ここ坂町病院における胃切除症例は年間約50~60例あり、外来における術後の通院症例も多い。しかも術後早期より腰痛、手足のしびれ感を訴える割合も多い事が判明した。そこで白根のデータと比較しながら、この原因を述べてみたい。

骨塩定量については、ボーンミネラルアナライザーがないため、昭和59年にわれわれが開発したデンスitometer(D)法によって測定した、これら症例の骨塩量の変化についても報告する。

9) 脾臓原発炎症性偽腫瘍の1例

岡村 直孝・川上 一岳(新潟臨港総合病院)
浅井 正典・三輪 浩次(外科)

脾臓原発の炎症性偽腫瘍はこれまでに本邦で2例、世界では11例の報告がある。今回手術にて切除し得た症例を経験したので報告する。症例は81歳の男性。主訴は腰痛、下痢。既往歴は高血圧、他。現病歴としては約2年前より腰痛、下痢が出現し、近医での画像診断により脾腫瘍指摘された。高齢かつ増大傾向ないため経過観察とした。平成2年1月頃より再び腰痛増強し、4月、当院に紹介された。理学的所見では脾腫瘍触知せず、異常なし。入院時検査では軽度の貧血、腎機能障害、低蛋白血症、低肺機能を認めたが、腫瘍マーカーは正常。超音波、CTにより径5cm大の充実性脾腫瘍を認め脾臓摘出術を行った。剖面は黄白色、境界明瞭、弾性硬、一部壊死を伴った充実性腫瘍で、病理学的には、炎症性偽腫瘍と診断された。